

吹田市立博物館

博物館だより

NO. 7

SUITA CITY MUSEUM



「西京神戸之間鉄道開業式諸民拝見之図」(神戸市立博物館蔵)

命、寺の檀越の幸福が増すこと、そして僧侶・在俗者とも修行が堅固であることを祈念するものです。そして下段には、向かって右から「南無八幡大菩薩」「南無大辯才尊天」「南無大悲多聞天王」「南無三寶大荒神」「南無越知山大権現」と仏教の天部二尊と神道の神祇三尊の号が記されており、さらにその下には「一切神祇」とあります。「南無」とは、帰依をするという意味で、これらの神仏をはじめとし、一切の神々に帰依をするということです。つまり、上記の願いがかないますようにとこれらの神仏に対して祈念しているわけです。

この「諸天神祇尊号」では神仏が並列して書かれています。このような形式の尊号は雲居禪師の作品としては非常に珍しいものです。雲居禪師は『往生要歌』の後序において、阿弥陀・釈迦・達磨・薬師・観音を信じる者にはそれぞれの名号を書き与えてきたと述べており、実際にこれらの名号が現存しているのが認められています。一方、神祇の号としては「南無諏訪方法性菩薩」と書かれた名号が唯一確認されており、諏訪大明神を氏神とする人物に書き与えたものと考えられています。これらのことから雲居禪師は、人々の抱く信仰の心そのものを大切にして、それぞれが信奉する神仏の号を授けて教化を行ってきたことがわかります。

そこで、あらためて「諸天神祇尊号」に列せられている神仏についてみていきますと、八幡大菩薩は仏教の大菩薩の尊号をもち、武門から武士の守り神として厚い信仰をあつめた神、弁才天・多聞天は仏法の守護神とされる仏教の天部の神、三寶大荒神は荒神のなかでも特に火を司どる火伏せの神、越知山大権現は福井県の山嶽霊場越知山の神で、権現は仏の化身としての神の名称です。これらの神仏への信奉はどのような意味があるのか、また雲居禪師は誰に与えたものかを推察すると、この尊号が似禅寺に伝来していることから開基の常愚希雲について考えてみるのが妥当と思われます。雲居禪師から授けられたこの尊号を常愚は日々礼拝し、祈りをささげていたのではないのでしょうか。



写真2 韋駄天尊号



写真3 諸天神祇尊号

新出資料紹介

雲居禪師の作品から



写真1 雲居希庸像(似禅寺蔵)

平成8年4月27日から5月26日までの間、本館で開催された「禅僧雲居希庸—その生涯と作品—」展では、江戸時代初期に活躍した臨済宗の雲居希庸禪師(1582~1659)(写真1)を紹介し、多くの方々に御観覧いただきました。この展示では、調査によってあらたに見出された作品7点を含め、36点の禪師の作品を出陳しました。これらの作品を通して、雲居禪師のたどり着いた宗教的境涯と人々への教化の方法に深い感銘を受けた方々も少なくありませんでした。奇しくも、この展示に呼応するかのよう、会期も半ばを過ぎた5月15日、またあらたに2点の作品が吹田市内の寺院から発見されました。発見されたのは、雲居禪師を開山とし、常愚希雲を開基として草創した似禅寺からでした。

2点の作品は、いずれも板に雲居禪師の書を陰刻したもので、板の上部には環が取り付けられており、壁にかけて礼拝できるようになっていました。「三洲護法韋駄尊天」と書かれた「韋駄天尊号」は、縦60.9cm、横13.7cm、厚さ0.9cmです。(写真2) 韋駄天は、鎌倉時代以降、寺院の伽藍を護る守護神とされ、特に禅宗寺院でさかんに造像されてきました。特に、この像をまつれば食事に不自由しないということから厨房に安置されることが多かったようです。この「韋駄天尊号」は、韋駄天像の代わりに壁にかけて礼拝したものと思われます。

もう一つの「諸天神祇尊号」は、縦61.1cm、横17.2cm、厚さ1.0cmです。(写真3) こちらは、上段と下段に分かれ、上段中央には、「今上主将聖躬萬歳」、その右側に「大小檀越福聚増長」、左側に「細素道者修行堅固」と記しています。これらは、徳川将軍の長

吹田停車場は仮開業後まもなく山崎・茨木とともに開業し、中間駅は当初からの高槻を加えた4駅となりました。

吹田操車場は大正12年(1923)に誕生しました。第一次世界大戦以後、近代産業の著しい発展にともなって鉄道の旅客・物資の輸送量は増大の一途をたどり、必然的に輸送施設の拡充改善が急務となり吹田操車場が設置され、従来大阪駅に集散していた

混合貨物の整理が大いに改善されました。また操車場開設の2年前に鉄道省 湊町工場(現JR西日本吹田工場)が吹田に移転し、その後鉄道関連施設や鉄道に携わる人々も増え、鉄道の街というイメージも形成されました。

一方、大阪近郊の私鉄は沿線の住宅開発とともに発達してきましたが、吹田の場合も大正期の北大阪電気鉄道の開通やそれにとまなう千里山住宅の開発などが先駆となり、現在の吹田市の形成に大きな影響を与えています。北大阪電気鉄道はその後、新京阪鉄道・京阪神急行電鉄などを経て、阪急電鉄千里線となり現在の北千里駅まで延長を重ね、千里ニュータウンの開発とあわせて大阪のベッドタウンとして発達していく基礎を作ったといえるでしょう。

鉄道を文化的な側面からみると、旅と鉄道は切り離せないもので、大正期から昭和にかけて吉田初三郎という画家が名所案内を兼ねて多くの鉄道沿線鳥瞰図を残しています。鉄



「吹田市鳥瞰絵ハガキ」(個人蔵)



「千里山住宅地平面図」(個人蔵)

道省が発行した『鉄道旅行案内』にも初三郎の挿絵が描かれ、庶民にとって鉄道の旅が身近なものとなった表れでした。

本展覧会では近代日本における鉄道の発達をみると同時に、吹田における鉄道敷設と市街地化なども視野に入れ、鉄道錦絵や鉄道沿線図などの絵画資料も交えて、吹田の鉄道史をみていただきたいと思います。

平成8年度特別展

「鉄道沿線物語 ー鉄道の発達と吹田ー」

平成8年10月26日(土)～11月24日(日)



「東京横浜鉄道往返之図」(神奈川県立歴史博物館蔵)

みなさんは、もくもくと煙を吐いて走る鉄の固まりを初めてみたときの人々の驚きを想像できるでしょうか? 鉄の道を力強く高速で突っ走る陸蒸気を、明治もまもない頃には、多くの見物人がひと目見たさに押しかけたようです。それまで陸上の交通といえば馬や駕籠ぐらしか知らなかった庶民にとって、蒸気機関車そのものが驚異の器械として登場し、また大量の物資や人間を短時間で運ぶその能力に魅せられ、当然のように文明開化の象徴として語られるようになりました。明治初期の錦絵に鉄道が多く描かれている背景には、まさに西洋の技術への興味と憧れがあったのではないのでしょうか。

嘉永7年(1854)ペリー艦隊が再び神奈川へ来航した際、将軍献上品としてミニチュアの機関車を持ち込み、実際に線路上を走らせた記録が残っています。明治新政府が鉄道建設を決定するのは、それから十数年を経た明治2年(1869)のことで、さらに3年、明治5年5月、品川ー横浜間の鉄道仮営業ののち、9月には新橋ー横浜間が開通しました。国を挙げての大事業である鉄道敷設は日本の近代化の根幹を成すものであり、殖産興業を実現するためには必要不可欠な重要事業であったのです。

関西では明治7年に大阪ー神戸間が仮開業し、明治9年に向日町ー大阪間を仮開業、翌明治10年2月には明治天皇臨席の下、京都ー神戸間鉄道開業式が盛大に挙行政されました。

つぎに、吹田での過書株の伝来をみてみましょう。織豊期、藤本家が過書株を2株所持していました。「藤本家所持過書株譲渡目録写」などによれば、先祖宗左衛門が2株所持し、弘治2年(1556)に三子にわけ、九郎右衛門1株、宗左衛門半株、五郎兵衛半株に譲渡されました。寛永13年(1636)に宗左衛門系株、五郎兵衛系株は1株にまとめられ、延宝4年(1676)には早田家へ譲渡されました。その後、半株づつに分けられ、片方は河面家へ譲渡されました。一方、九郎右衛門系株は天正15年(1587)に1/3づつにわけて継承され、元和9年(1623)に半株2つにまとめられ、片方は藤本家で幕末まで継承されましたが、もう片方

(二七五二)
宝曆貳申年九月四日
宝曆極(黒印)
五拾石船 改(黒印)
三組
三右衛門

- 6 -

は、文政13年(1830)に気比家へ譲渡されました。このような経過を経て、幕末には、藤本家、早田家、河面家、気比家の四家で過書株を半株づつ所持していました。(表参照)

気比家の過書船鑑札は2点残されており、形は将棋の駒形で、大きさはどちらも縦13.6cm、横9.1cm、厚さ0.9cmです。今まで、吹田市内の過書船鑑札は藤本家所蔵の1点が確認されています。(この鑑札は当館第1展示室に展示してあります。) 藤本家の鑑札と気比家の2点は、形状、大きさ、表記のしかたはほぼ同じです。ただ、藤本家所蔵の鑑札は、両面の年月日が同じなのですが、気比家のものは、63年および64年の隔たりがあります。元禄元年の日付は最初に過書船株の許可を受けた年、寛延4年および宝暦2年は船株をふやすなどの変化があって株札を改めたときの年だと思われます。

淀川の水運は過書船だけでなく様々な船が営業していましたが、たびたびこれらの船仲間との間に紛争がありました。運賃の安い屎尿船などが活躍するようになると過書船はしだいに圧倒されるようになったのです。今回寄贈いただいた古文書のなかに、文久3年(1863)の過書船衆 中惣代気比武左衛門から奉行所にだされた過書船の窮状を訴えた嘆願書がありますが、この段階では過書船がかなり衰微していた様子がうかがえます。ついには、明治政府の行政改革によって過書座・伏見船や高瀬船の各役所・役人は廃止されました。さらに、蒸気船の出現によって過書船を含む在来の船は決定的な打撃をうけ、やがて姿を消してしまったのです。

講演会のご案内

●11月10日(日) 午後2時

テーマ 「吹田の交通動脈

阪急千里線の誕生と役割」

講師 関西大学教授 末尾 至行氏

●11月17日(日) 午後2時

テーマ 「汽車の窓から見た近代日本」

講師 追手門学院大学教授 宇田 正氏

各講演会とも会場は吹田市立博物館2階講座室。聴講は無料で先着順(120名)です。

吹田市立博物館だより 第7号

平成8年10月5日発行

吹田市立博物館

〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06)338-5500 FAX. (06)338-9886

■交通案内

JR岸辺駅下車徒歩20分

阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス②・③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

